

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20530622

研究課題名（和文）臨床心理学における質的研究法教育カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of the curriculum for qualitative research methods for clinical psychology

## 研究代表者

能智 正博（NOCHI MASAHIRO）

東京大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：30292717

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトは、臨床心理学教育の一環として質的研究法を組み込むプログラムを開発・提案することであった。成果として、研究代表者は『臨床心理学をまなぶ 6：質的研究法』を著した。本書は、臨床心理学とその関連領域の大学生・大学院生が、質的研究法を学ぶ際の指針を示したものである。また、本書および他の報告等において、担当教員が質的研究を臨床心理学教育カリキュラムの一部として教える際の大枠を提示した。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to develop and propose a program that would incorporate qualitative research methods into the education of clinical psychology. As a result of this project, the researcher has published a book titled “*Introduction to Clinical Psychology 6: Qualitative Research Methods.*” It provides for undergraduate/graduate students of clinical psychology and the related fields a guideline to learn qualitative research methods. The book, as well as other reports, also presents a framework to teach qualitative research as a part of the curriculum of clinical psychology.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：教育系心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：質的研究法，カリキュラム，教育法

## 1. 研究開始当初の背景

臨床心理の専門職の養成・教育システムにおいて重視されるようになってきたのが研究法の指導である。臨床心理学の専門職は、実践家であると同時に科学者でなければならないとされるが、ここで科学者とは、データの分析をもとにして実証的に対象者のあり方を判断したり実践の効果を判定したりする能力を持つ者を意味している。

従来そうした能力は、数量的で自然科学的な研究を行う能力と同一視されていたが、近

年では、対象者の語りや自然場面でのふるまいを重視した質的な研究法と、それが涵養する問題発見・整理の能力もまた注目されつつある。その背景のもとで、臨床心理学のカリキュラムにおいても、質的研究法の教育が試みられ始めているが、教育法についてはまだ模索段階にあり、質的研究の経験をもつ比較的少数の教員が各自工夫をして教育を行っている段階である。

申請者はこれまで、自ら質的研究の実践を行うほか、質的研究の内容の紹介や教育法の

検討に努め、学会のシンポジウム等で、心理学において質的研究を行っている研究者と意見交換を行ってきた。発達心理学や社会心理学などの分野でも、質的研究法は次第に認知されてきたと言えるが、教育法はまだ未確立の段階である。臨床心理学には事例研究の伝統もあるので、ある程度はその実践や教育の蓄積があり、それを発展させることで臨床心理学から教育法を提起していくこともまた、可能ではないかと考えられる。

## 2. 研究の目的

今回のプロジェクトでは、臨床心理学を中心とした心理臨床実践分野における質的研究の特質について明らかにしつつ、その教育法に資する具体的な解説やプログラムを作成し、実施の指針となるような教科書・参考書を作成することを中心的な目的とする。より細かな目的は以下の3つに分けることができる。

1) 従来の研究法の教育が心理臨床の実践に関してもつ効用と限界について明らかにすること：臨床心理学でこれまででなされてきた伝統的な研究法の教育が、臨床現場における実践にどのような意義をもってきたのか検討する。現在注目されつつある質的研究法は従来の臨床心理学の事例研究と同じものではなく、事例研究をどのように乗り越え、そこから何を学ぶことができるのかといった問題を考察していく。

2) 臨床心理学領域における質的研究法の適用可能性について概観し、適切な教育内容についての整理を行うこと：一口に質的研究法と言っても、その認識論的背景や技法・手続きなどは非常に多様である。臨床心理学の実践を研究する際に、質的研究のどの学派がどのような貢献をなすかを検討しつつ、それらをどう使いこなすことができるかを整理する。

3) 臨床心理学教育のカリキュラムのなかに質的研究法の教育をより効果的に組み込んでいくためのモデルを作ること：質的研究全般が臨床心理学教育に有用であると単純に考えるのではなく、質的研究のどの要素がどう役に立つのかを検討し、それらの要素が既存のカリキュラムのなかにどう位置づけられるのかを提示する。

## 3. 研究の方法

a) これまでの臨床心理学における研究法の教育とその実践は、臨床の現場においてどのような効用と限界をもっていたのか、心理臨床の専門家の方々への調査を行う。質問紙などで広く浅く調べるのではなく、少数事例

に絞って心理専門職の実践内容や具体的な経験に即し、研究活動の意義と可能性を考えていく。より具体的には、半構造化インタビュー手法を用いながら、多様な現場で実践する臨床心理の専門家の聴き取り調査を行う。

b) 臨床心理学領域の質的研究のこれまでの成果を幅広くレビューしつつ、その研究対象・目的と研究方法を対応させながら整理していく。文献の検討を基礎にしながら、臨床心理学とその関連領域において質的研究を行っている研究者との合同の論文検討会などをもち、臨床実践に関わる質的研究の広がりや多様性について整理すると同時に、その教育内容として何が求められるのかを検討する。

c) 質的研究を取り入れている海外の大学・大学院の授業、学会などで催される研究法のトレーニング・プログラムを対象に、その教育方法やその効果について調査する。直接訪問してカリキュラムの全体について資料収集を行うほか、また、授業やトレーニングの参加観察を行う。特に注目するのは、質的研究法が臨床心理学の全体カリキュラムにどのように組み込まれているか、教材としては質的研究法のどのような面が授業のなかで強調されているか、心理臨床実践に生かすための工夫は授業のなかでどのような形で行われているか、などである。

## 4. 研究成果

研究成果は、雑誌論文、学会発表などで部分的に公表されたが、最終的には研究者自身の単著となるテキスト、『臨床心理学をまなぶ 6：質的研究法』（東京大学出版会、2011）にまとめられ、臨床心理学における質的研究法の初学者にも理解できるような形で平明に記述された。以下、各章の内容を辿りながら、今回の研究目的に照らしてどういった成果が反映されているかを概観する。なお、全体は3部構成となっており、1～3章が第Ⅰ部「質的研究を始める前に」、4～9章が第Ⅱ部「研究計画とデータ収集」、10～14章が第Ⅲ部「データの分析と結果の提示」とされている。

第1章「質的研究は何をしようとしているのか」：ここでは、実践領域における研究活動の意義をあらためて特徴づけた上で、質的研究の役割を再定義した。研究活動は「地図作り」の比喻で記述され、現実を単にコピーしようとするのではなく、研究者の研究設問に沿って現実を再構成すると同時に、それ自体が現実のあり方を変える実践であるという特徴が示された。

さらに、質的研究が描こうとする「地図」

の特徴を、“主観に現れてくる意味の世界の地図”、“主観的な意味を支える構造を描き出す地図”、“地図制作の過程を描く地図”という3つの側面から解説した。その上で、いずれも心理臨床実践を捉える知を作り出す営みとして、意義をもつ点が確認された。

第2章「今なぜ質的研究なのか」：本章では、質的研究が臨床心理学領域において要請される歴史的・社会的背景を解説するとともに、伝統的な事例研究の意義と限界についても考察した。第1節では、社会的実践をとらえ、さらには批判していく道具として質的研究を位置づけた上で、研究自体を実践とみる再帰的な視点にも言及した。

今回のプロジェクトの目的と密接に関わるのは、第2～3節である。2節は臨床心理の実践を研究することの社会的要請を指摘し、従来の事例研究が対象の理解を深めるのに有効であるという点で評価しつつも、より一般的な仮説を生成する道具としての問題点を指摘した。さらに、効果研究とプロセス研究に言及し、実践研究の可能性にもふれた。第3節では、心理職の役割に照らした質的研究の役割をまとめ、臨床実践に求められる姿勢と質的研究の密接な関係を論じた。最後に、質的研究の教育が心理臨床実践のトレーニングの一部に寄与する可能性についても論じた。

第3章「〈語り〉とは何だろうか」：本章においては、心理臨床実践において無視することができない「語り（ナラティブ）」の概念の多面性をまとめた。質的研究の教育という面でも、こうした基礎概念の理解は不可欠なのだが、初学者にとってはなかなか難解であり、常識的な解釈に陥りやすいと思われたためである。語りは単なるオリジナルな内面の代行ではなく、その場における構築であると同時に、現実を生成する力をもつ。さらにそれは聴き手に対する行為であり、聴き手との間における共同構築である。語りのこうしたダイナミックな諸属性を理解しておくことは、質的研究の初段階において前提となると考えられる。

第4章「質的研究をどう立ち上げるか」：本章では、質的研究を始める際に重要な、研究上の問いを育てて研究計画にまとめ上げるところまでを解説した。質的研究で問いを立てる際にはしばしば、現場における〈私〉の疑問から出発してそれを〈私たち〉の問いへと発展させたり、そのような疑問をもつ自分への理解を深めたりする過程を辿る。これは臨床実践現場におけるクライアント理解の過程とも共通点をもつ。

そうした問いを実行可能な研究設問へと

高めていくためには、フィールドにアクセスし、実現可能性や倫理面の配慮を徹底した後、研究計画書を書いて他者の目を通過させることが必須であることと、その手順において留意すべき点について解説を行った。

第5章「観察とはどういう行為か」：本章では、質的研究においてしばしばデータ収集に用いられるエスノグラフィ的な観察法の意味とその背景について議論した。まず、伝統的な研究方法における客観的観察が単なる理念でしかないと批判し、それに代わって「行為としての観察」の概念を提起した。ここでは、観察者の観点や個人的・状況的な要因を考慮した観察や、対象者への関与を意識した観察の必要性を議論した。その上で、質的研究法における観察の対象として、対象者の生きる環境、対象者のふるまいとそれに関わるエピソード、対象者を見る自分、といういくつかの面に分かれることを明らかにした。

第6章「どのように観察するか」：本章は、質的な観察法の具体的手順とその習得法に関わる解説を含んでいる。その手順はフィールドとの関係の構築に始まるが、その時点からすでに、予備的なデータ収集は開始されている。関係の構築は、どういう関係がフィールドに対してもっとも非侵襲的か、豊かなデータの生成にもっとも貢献するか等を考慮しつつ、具体的なやりとりのもとで微調整を続けていかなければならない。

章の後半では、実際にフィールドで観察を行い、記録をつけるまでの過程について、その骨法を解説した。それは、日常的な見方から距離をとりつつ、様々な問いを投げかけてみて、そこで浮かび上がってきた対象の特徴を言葉で記録していく作業である。その手順は、臨床実践のトレーニングを行う際にも利用可能である。

第7章「インタビューとはどういう関係性か」：本章では、語りを引きだす文脈としてのインタビューの意味とその形態を解説した。どういうタイプのインタビューを施行するかという点も、研究設問に応じて選択していかねばならない。こうした点は、臨床実践における面接法を学ぶ上でも基礎となると考えられる。また、章の後半では、インタビュー研究における倫理にも言及し、より倫理的な行為にしていくための工夫としてインフォームド・コンセントや倫理委員会の利用とその限界についても論じた。

第8章「インタビューをどう準備するか」：ここではまず、調査インタビュー実施に関わる具体的な準備の手続きとして、イン

タビュー対象者の「サンプリング」の方法を論じた。量的研究におけるランダム・サンプリングとは異なる、目的的なサンプリングが必要になってくるが、その際の留意点が解説された。また、インタビューに先立って作成されるインタビュー・ガイドについても、その作成方法の議論を行った。それは単なる質問のリストアップではなく、研究設問や目的に応じた構造化が求められるし、各設問の言い回しについても検討しておくことが必要である。また、質問方法以外の道具立ても工夫しなければならないことがある。

第9章「インタビューをどう実施するか」：本章では、質的な調査インタビューを実施する際の留意点をまとめているが、心理臨床実践、特にカウンセリングのトレーニングと重なる部分も多い。インタビュー・ガイドを用いてはいるが、傾聴の原則は共通であるし、対話を発展させるための追加質問はカウンセリングにおいても重要なスキルである。また本章では、どういう立場での実施になるかによって、手続きが異なる点も指摘された。社会構成主義的な立場に立つ研究者であれば、インタビュアーの側の積極的な関わりのもとで、より豊かな語りを得ていくことが目標になる。

第10章「質的データの分析をどう準備するか」：ここでは、質的データの分析の前提としての読むという作業と、それをトランスクリプトにするという作業の手順について議論している。質的データの特徴は意味をもつことであり、意味は文脈によって決定される。したがって、質的データの分析のトレーニングは、意味を読み文脈を読むトレーニングでなくてはならない。この点は、心理臨床実践のなかで、クライアントの語りを理解する過程とも共通であり、臨床スキルの育成にも応用できる。

また、多くの質的データは音声資料を文字資料にするという作業を経て、直接の分析対象となることが多い。この作業は機械的な置き換え作業ではなく、解釈を伴う分析の第一歩に位置づけられる。本章では、書き起こしに伴う解釈作業と予備的な分析作業の概要を論じている。

第11章「質的な分析はどのような作業か」：本章では、様々なタイプをもつ質的な分析の共通点を押さえた後、カテゴリー分析とシーケンス分析に分けて、その手続きの概略を解説した。カテゴリー分析では、グラウンデッドセオリー法とKJ法をとりあげて比較してその違いを明らかにした。一方、シーケンス分析では、ディスコース分析と会話分析の紹介を行い、その概要を具体例とそ

ともで紹介した。これらについての知識は、研究設問に応じて分析法を選択したり、独自の分析法を工夫・発展させたりするための前提になるものである。

第12章「分析をどう展開するか1—内省を深める」：本章および次章では、質的データの読みをさらに深め、研究の質を高めるために配慮すべき点とその手続きについて議論した。12章では、質的分析は研究者の主観に依存する部分を排除できないが、主観を鍛えて「客観」と呼ばれている状態に近づけていくことは可能である。

具体的には、その作業の中心に内省という態度を置き、その対象を分類するところから議論を開始した。その上で自分の思考を対象化するツールとして、まず、覚え書きと図表作成の方法論を整理した。加えて、比較という思考作業の意味を論じ、より幅広いデータに目配りした結論を導くための工夫を紹介した。また比較作業との関連で、分析のこの段階における文献資料の利用方法についてもその指針を提示した。

第13章「分析をどう展開するか2—対話を広げる」：この章では、前章に続いて分析を深める手法を議論しているが、特に、分析結果を他者の目にさらして、別の視点からのコメントを組み込んでいく方法を紹介した。「理論的サンプリング」、「トライアングレーション」、「ミックス・メソッド」など、質的研究においてキーワードになる概念の解説とその手法の利用手順について解説した。こうした方法の多くは、心理臨床実践にはない、研究独自のものである。また、章の後半では、質的教育の授業において使用可能な、コーディング・ゲームの手順についても解説した。

第14章「研究の結果をどう伝えるか」：この最終章では、分析結果を他の研究者や対象者にレポート、論文の形で伝えるときの配慮について議論した。本章の内容は、臨床心理学のみならず様々な分野の質的研究に当てはまるであろう。研究はコミュニケーションの一環であり、伝えるという作業をもって完成する。本章では、まず、書くというコミュニケーションの特徴について基礎的な考察を行ったあと、特に論文として専門誌に投稿するときの形式や内容について、初学者に勧められるポイントを説明した。最後に、そうした論文を評価するときの視点にも言及しており、その視点は初学者が自分の原稿を修正する際にも有用である。

この本その他、最終年度には、臨床心理の専門職のインタビューをもとにして、その体験

を複数の視点から分析する試みや、インタビューの結果をその語り内容だけではなく、非・言語的な身体表現から分析したりする試みも行っている。こうした研究実践は、質的研究の分析法の新たな試みであり、研究法の新たな方向を示唆するものと言える。それは同時に、質的研究の教育に組み込まれるべきスキルに発展する可能性をもっているものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ①原田満里子・能智正博 (2012). 二重のライフストーリーを生きる—障がい者のきょうだいの語り合いから見えるもの. 質的心理学研究, 11, 26-44. (査読有)
- ②能智正博 (2011). ある心理専門職の語りの協働的分析の試み. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 34, 213-218. (査読無)
- ③能智正博 (2010). 質的研究をどう読むか. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 33, 102-108. (査読無)
- ④能智正博 (2010). 臨床実践の研究法の教育—英国の試みについて. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 33, 228-229. (査読無)
- ⑤能智正博 (2010). 臨床実践の研究法の教育—英国の試みについて. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 33, 228-229. (査読無)
- ⑥能智正博 (2009). インタビューにおける〈語り〉をどうみるか. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 32, 225-228. (査読無)
- ⑦能智正博 (2009). 質的研究法の視点と実践研究. 臨床心理学, 9(1), 22-26. (査読無)
- ⑧能智正博 (2008). 質的研究と当事者理解. 家裁調査官研究紀要, 7, 1-14. (査読無)

[学会発表] (計 8 件)

- ①能智正博 (2011.9.16). ある心理専門職の語りの協働的分析の試み I—単一のテキストから生まれる多様な意味— 日本心理学会第 75 回大会, 東京.
- ②Nochi, M. & Harada, M. (2011. 7.29). The body as a catalyst in the construction and reconstruction of self-narratives: Analysis of a collaborative auto-ethnography project with a woman with a disabled sibling. *30th International Human Science Research Conference*. Oxford, UK.

- ③内藤哲雄・能智正博・丸山千歌・小澤伊久美 (2010.12.11). PAC 分析のデータを実践者・被検者・第三者が共に語り合うデータセッション. PAC 分析学会第 4 回大会, 横浜.

- ④Nochi, M. (2010.10.7). The meanings of constructing one's life-story: An attempt of collaboratively analyzing the process of an auto-ethnographic project.

*The 11th International Interdisciplinary Conference: Advances in Qualitative Method*. Vancouver, Canada.

- ⑤Bamberg, M., 能智正博, 渡邊芳之, サトウタツヤ (2010.6.27). 第 2 部「質的研究の基準」. 国際シンポジウム『質的研究の最前線—移行のナラティブと研究評価をめぐって』. 東京大学.

- ⑥能智正博・原田満里子 (2010.3.26). 自己エスノグラフィの実践における語りの揺らぎと気づきのプロセス—「メタ語り」から見た語り直しの機序に着目して. 日本発達心理学会第 21 回大会 神戸.

- ⑦能智正博 (2009.2.11). 対話としての・ナラティブ・分析 日本音楽心理学音楽療法懇話会第 261 回例会 東京.

- ⑧下山晴彦・能智正博・植坂友里・中澤潤・市川伸一 (2008.10.11). 心理学における実践研究の有効活用に向けて 日本教育心理学会第 50 回総会 東京.

[図書] (計 7 件)

- ①能智正博 (2011). 『臨床心理学をまなぶ 6: 質的研究法』(全 366 ページ) 東京大学出版会.

- ②能智正博 (2011). 発達の質的研究法と実例 (日本発達心理学会編) 『発達科学ハンドブック』(pp.73-83) 新曜社.

- ③能智正博 (2010). 臨床心理学的研究 (池田勝昭・目黒達哉編) 『こころのケア』(pp.188-200) 学術図書.

- ④能智正博 (2008). 失語症の〈語り〉を聴くこと—“病い”の構築という視点から (やまだようこ編) 『質的心理学講座 2: 人生と病いの語り』(pp.51-78) 東京大学出版会.

- ⑤下山晴彦・能智正博 (編) (2008). 『心理学の実践的研究法を学ぶ』(全 351 ページ) 新曜社.

- ⑥能智正博 (2008). よい研究とはどういうものか—研究の評価 (下山晴彦・能智正博編) 『心理学の実践的研究法を学ぶ』(pp.17-30) 新曜社.

- ⑦能智正博 (2008). 質的分析法 (下山晴彦・能智正博編) 『心理学の実践的研究法を学ぶ』(pp. 225-240) 新曜社.

[産業財産権]

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

能智 正博 (NOCHI MASAHIRO)  
東京大学・大学院教育学研究科・准教授  
研究者番号：30292717

### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

### (3)連携研究者

( )

研究者番号：